

【うらんだー】

「金ちゃんは、米国人が好きですか」

懐爺がとつぜんきいてきました。

気分上々のぼくは、

「わしは、こめはすきじゃが、べいこくじんは、すかん」

すぐにこたえました。

「どうしてですか。原爆を落としたからですか」

「それもそうじゃが、にほんじんがすかん」

「意味がわかりにくいですね。つまり金ちゃんは、米国人を好きな日本人が嫌いだから、米国人じゃ好かんというわけですか」

「すき、じゃのうて、なんちゅうかのう」

「ああ、媚（こ）びるのでしょうか。いまの日本人は米国人に媚びる者ばかりですからね」

「そう、その、こびるじゃ。まるんで、いぬじゃ」

「負け犬根性ということですね」

「それだけじゃないぞい」

「沢山あるんですねえ」

懐爺は呆れたという顔をしました。

「べいこくというなまえが、すかん」

「むかしは、亜米利加という漢字をあてていましたからね。だから米国。露国、独国、仏国ですから、ほんとうなら亜国なんですが、亜細亜という漢字もありますからねえ」

「りくつはええ。なんで、そんなこときいたんじゃ」

「どうやら、その米国人のおばけがでたらしいんです」

「おばけなら、べいこくじんでも、べつだんきらいじゃないのう」

「そういうとおもってましたよ。ではよろしく」

懐爺は平然といいました。

「なにがよろしくじゃ」

「公民館にその米国人のおばけがいますから、国に帰るよう、金ちゃんが説得してくださいな」

「わしがかい。かいじいじゃないんか」

「わたしはお腹が痛いんです」

懐爺は腹を押さえたが、仮病にきまっている。

懐爺は嘘をいうとき、かならず耳が小刻みにふるえるから、ぼくだけには解る。

「わしはあたまがいたい」

これは嘘ではありません。

「そんなこといわないでお願いしますよ。【うらんだー】が公民館に居座ると、あ

れこれ催し物ができなくなります」

懐爺は村長でもないのに、そんなことをいいました。

「そのおぼけは、【うらんだ一】いうんか。いかにもおぼけくさい、なまえじゃのう」

「語源はわかりませんが、恨んだ一でも、うらめしやでもありません。嗚呼(ああ)いたたた、盲腸かもしれませぬ」

「しからば、わしが、しゅじゅつしてやろうかのう。おいしゃさんごっこは、とくいじゃ」

「わたしのは慢性盲腸ですから、手術は要りませぬ。安静第一です」

「わしもその、あんせいだいいちというやつじゃ。おぼけとつきあいすぎたせいか、まわりのみんなが、わしのこと、おぼけっぽくなつとる、いうんじゃ。わしはあたまがいたい」

「それは褒め言葉ですよ。金ちゃんもいよいよ」

そこで懐爺は口ごもりました。

「いよいよ、なんじゃ」

「いえあのその、いよいよいよいよ、とிட்டんです」

懐爺はごまかしました。

「そうはきこえんじゃったのう。わしもかいじいとおなじで、みみがふるえてきたぞい」

「いやはや、金ちゃんにはかかないませぬ。お願いですから、今回だけはおゆるしを」

「もしかして、かいじいは、べいこくじんが、きらいなんか」

「わたしは人種差別がきらいです。それではよろしく」

というわけで、ぼくは公民館に行きました。

【うらんだ一】は予想に反して、公民館の中ではなく、玄関の外にいました。

これなら問題なかろう。

国に帰ってもらふ必要なんか、あるのかな。

【うらんだ一】は、懐爺がいうんだから、米国人にまちがいはないんだらうけど、黒人でした。

おぼけには見えない。

「なんじゃ、くろんぼかい」

「それ、いけません。差別用語ですな」

【うらんだ一】がぼくを見ていきました。

聞き慣れているのか、それほど怒ってはいない。

「なんじゃ、にほんごしゃべれるんか」

「おぼけですから、一応どんな言葉でも話せます」

「あたまのいいおぼけじゃのう」

差別用語を使ったお詫びに、お世辞をいいました。

「坊ちゃんは、なにしに来たのでしょうか」

「まだ、にほんご、うまくないのう。わしは、ぼっちゃんじゃなく、がきんちよ」

「それなら、餓鬼んちょさんは、なにしに来たのでしょうか」

「【うらんだ一】を、くにかえすためじゃ」

「帰りません。ぼくは米国に恨みあります」

「なんじゃ、にほんに、うらみがあるんじゃねえのかい」

「ぼくは戦争中、米国兵士でした。広島で捕虜になっていました。そして原爆にやられたんです」

意外な言葉に、ぼくはしばし声を失いました。

「すると、もしかして、あれかのう」

「はい、あれです。ぼくはもともと白人です。原爆のせいで、黒こげになって、黒人になってしまいました」

「ほんまかのう」

しげしげと見ると、黒人にしても黒すぎる。

「ぼくを真っ黒にした国になんか、還りたくはありません。それに国に還っても、ぼくは黒人として扱われ、差別を受けます」

「そらあ、けしからんのう。わしは、じんしゅさべつは、きれいじゃ」

もちろんこれは、懐爺の受け売りです。

【うらんだ一】はうれしそうに笑って、

「ぼくはもともと白人です。けれども白人は肌の色で、差別しますからねえ」

「だども、くにかえれや。くにかえって、げんぼくはんたい、じんしゅさべつはんたい、やってくれや。それに」

「それに、なんじゃ」

「ぼくは、おばけですから」

「だから、なんじゃ」

「どうせ、差別をうけます」

「べいこくにも、わしみたいなもんは、おるじゃろ。わしは、おばけさべつ、おおいにはんたいじゃ」

【うらんだ一】はうれしそうに笑って、

「餓鬼んちょさんの口から、それを聞いたかったのです。おとながそれをいっても、まったく信じられないものです」

そして、【うらんだ一】は消えました。

おそらく、国に帰ったのでしょう。

お国ではあいかわらず、差別があるんだらうけど、おばけだって家族の近くに居たいものでしょうから。